

第18回歴史地震研究会の巡検参加記

(財)地震予知総合研究振興会地震調査研究センター* 松浦 律子

Report of 18th Field Trip from Kisakata to Sakata

Ritsuko S. Matsu'ura

ADEP, Earthquake Research Center

1-5-18, Sarugaku-cho, Chiyoda-ku

Tokyo, 101-0064 Japan

1. はじめに

歴史地震研究と地震予知振興会との関係は古くからあり、本部の相田先生などは研究会にも長く参加されてこられたが、私が研究会に参加するのは、前回の長野に続いて今回が2度目、巡検に参加するのは初めてであった。この研究会は、非常に学際的であり、墨蹟麗しい文書原本を、すらすらとお読みになる文科系の方々から、Inversion で計算をする方まで一同に会する珍しい機会である。巡検も個人で巡るのとは違ってまた大変楽しいものであった。今回は特に象潟に精通しておられる林先生が研究会から巡検からすべてご用意くださっておられたので、参加者は快適に秋田南部から山形県北部の鳥海山を挟んだ日本海沿岸を旅することができた。

私は白河の関から北に関して若い時分は地縁がなく、「日本の地震活動」の作成過程や、歴史地震の被害分布図作成過程で不惑になってからずいぶん地名などになじむようになって来た。従って巡検中車窓から見えるものは全て珍しく、興味を引いたものがいくつかある。例えば、研究会のあった象潟町は、自動販売機とコンビニがない、大変落ち着いた町であった。放課後の小学生が釣り道具を持って海岸へと連れ立って行くところなど、うらやましい環境だった。庄内平野の道路脇には、日本海と平行に地吹雪よけを冬場になると設置するためのポールがずっと並んで立っていた。田にわざわざ日陰を作るとは面妖な、と最初思ったのは、すっかり雪が積もった中をスキー場へ向かうしか冬場にこういうところに来ていなかったためである。また、象潟でも遊佐でも、瓦屋根に使われている瓦が大変きれいな光沢のある黒色のものが多かった。これは、耐寒仕様であるか、融雪時に少しでも早く屋根の雪をとかす工夫か、正解はまだ分っていない。どなたかご存知の方がおられれば、この瓦の主な産地

とともにご教示いただければ有難い。日本海の海岸沿いに生える松林が大変傷んでいることには驚いた。これは巡検だけでなく、行きの秋田から象潟まででも大変な荒れようであった。日本全国各地でここ数十年、松くい虫の被害、酸性雨、化学肥料の利用による里山の放置、など様々な原因に寄ってどこの松林もやられてきた。落ち葉を肥料として林から奪取してしまう稲作農耕とセットで広がった比較的痩せ地に育つ松林は、宮城の松島、皇居前広場といえども膨大な手入れがいまや必要とされている。汚染とは無縁だと思った秋田や山形の海岸でも対岸の大陸からの酸性雨などの影響で同様であったとは。

今回の出張に際して、「ゾウガタまではどうやって行くの?」と経理の者に言われたように、1804年の象潟地震は意外に人口に膾炙していない。毎年秋には象潟町と遊佐町とで鳥海山を挟んで国境を決める綱引き大会が行われており、この綱引きの模様や結果はしばしば全国ニュースに流れる。2001年は遊佐町が勝ったそうである。象潟町は連敗を喫しているようなので、2002年には今回の研究会にご尽力いただいた町に激励電報を研究会からお送りしてはいかがでしょう?

2. 秋田県側での巡検

巡検は、まず1804年の地震までは海と島であった「象潟の九十九島」を間近に見るところから始まった。それまでは「日本海側の松島」といわれる景勝地であり、潟の中に松を抱いた大小の岩島がいくつも点在する場所であった。元は2500年前の鳥海山北部からの岩屑なだれによって、海岸が埋め立てられ、流山が島となって点在するようになった。その後砂嘴などによって海との通路が狭くなり、松島を多数抱えた汽水湖が形成された。ここ全体が地震によって数m隆

* 〒101-0064 千代田区猿樂町1-5-18 千代田本社ビル5F

起して離水したので、湖だった部分は早速耕作地となり現在では田圃の中に松島が点在している。田植え時は田に水をはるのでやや往時の面影がみられ、巡検のような秋には、黄金色の稲穂の海に松島が浮かぶように見える。西行法師や松尾芭蕉も訪れ歌に詠んだ九十九島のうち、小さいものは耕作地を拡大するために随分岩を動かしてしまい、田になっている。できる限り耕作地を拡大したい領主に対して蛸満寺の住職が起こした景観保存運動によって、ようやく現在の状態が保たれたらしい。幾つかの島は現在も私有地として果樹を植えられたりしていた。

海岸に残る「唐戸石」は、高さ4m、幅5mほどの大きな岩であり、現在の堤防の外側の岩場の中にある。岩には穿孔虫の巣穴後が水平に並んだものがある。いろいろな高さに縞状に残っていた。地震以前にはそのいずれかが海水面と同様の高さにあったのであろうが、岩自体が津波で移動した可能性もあり、1804年の地震による正確な隆起量の根拠とはできないようである。

次に訪れた蛸満寺は、地震以前には潟を望む岬に位置していた寺であるが、現在田圃の中にある。象潟地震の犠牲者を慰霊するお地藏さんのほか、芭蕉の句碑、親鸞の座った石、鎌倉執権北条時頼より拝領のつつじなど、平安時代開山の古い歴史や、「日本海側の松島」の中心であったことを感じさせるものが多々あった。「西行法師が歌に詠んだ桜」というのは、どう見ても樹齢30年以下の若木であり、十数代目のものであろうか。入り口に大変かわいい猫の親子が寛いでいた。

このあと、象潟タワーという、国道沿いの展望台から九十九島の全景や日本海、鳥海山を展望した。このタワーは津波の時には避難場所になりそうである。タワーを後にして南下して、山形県に向かった。車中でもちょうど県境のあたりが、鳥海山からの真水が海中に湧出する一帯であり、この地方の名産である、夏に食べられる岩牡蠣の産地となっていたとか、鳥海山の溶岩流の遠望など、林先生の丁寧なご案内を受けた。

3. 山形県側での巡検

山形では遊佐町を抜けて南側からの鳥海山を眺めつつ、酒田市北境のトレンチ調査跡地を訪れた。ここは、1894年庄内地震の発生源と目されている観音寺断層の調査地点であったが、トレンチで調査したような表層までの変位はこの地震に関してはみられな

かったそうである。ここでは産総研の小松原氏から県による活断層調査時の模様などの説明を受けた。トレンチ調査も好きなところを掘れるとは限らず、また何箇所も一度に調査できるわけではない。いろいろな制約の中で調査されていることがよく分かった。

ここで昼食を食べた。この研究会の間には、ゆつくりと進む台風が東海地方や関東地方に大荒れの天候をもたらしていたが、巡検も含めてこのとき日本海側は大変な好天にめぐまれた。帰路の航空機の心配をする人も、バスの外でお弁当をつかったときには僅かな木陰を求めたほどであった。

このあと酒田市の中心部を通り、1976年の酒田市の大火を逃れて残っている本間家本家を通り過ぎて、海岸近くの丘の上に建つ光丘文庫へ向かった。ここは本間家歴代の収集文書などが収蔵されている現在は酒田市立の文庫である。土岐田氏のご配慮により、我々一行のために地震関係の所蔵文書がすでに多数並べられており、めったにお目にかかれない文書原本を間近にみながら、土岐田氏や北原先生、津村先生などこの文庫を何回も利用された方々による個々の文書の解説などがあった。明治庄内地震の時に、被害の状況から、沿岸の地震ではなく内陸の地震であり、津波の心配は不要であると看破した地元の方の話などが残っているのも、地域の文庫ならではの。特に素人にも面白かったのは明治庄内地震による被災地の絵巻物で、火災や建物の倒潰などの様子を伝えている。どの場面にも松が描かれていた。光丘文庫で顕彰されている本間光丘は、砂防林として酒田で松の植林を始めた人であり、何世代にもわたる事業の継続によって現在の砂丘沿いの松林が形成されるようになったという。

帰ってから調べたところ、1976年10月29日の酒田市の大火で本間家本家の家屋が残ったのは、屋敷内にあった常緑の大木タブノキ(犬楠)が延焼を食止めたことによるらしい。死者1名、負傷者1003名、焼損戸数1744戸で11時間燃え続けた火事から木が文化財を守ったわけである。タブノキは、象潟の蛸満寺の境内にも大木があった。自宅の近くでは近年地価の下落によって再びミニ開発が盛んとなりつつある。邸宅でお葬式が出ると、ほどなく土地は2~30坪未満のパナナのような区画に区切られ、ケヤキでも桜でも垣根の椿さえ消えうせ、隣家との間のペンキ塗りは二度と不可能なぐらい近接して木造家屋が立ち並ぶことになる。目先のことに追われて日増しに災害に対して脆弱になり、文化的にも劣化してくるのは都市の

宿痾なのだろうか。

4. おわりに

光丘文庫の玄関前で記念撮影をしたあと、かなりの人は飛行機の欠航を心配して酒田駅から新庄経由で山形新幹線などを目指して分かれていった。残りは庄内空港で月山を眺めて夕方のフライトを待った者と、再び象潟まで戻り、公民館に停めてある自動車

まで戻った者となった。幸いにも台風による欠航は庄内空港では見られなかったが、沖縄までの加藤先生などはどうなさただろうか。

林先生には徹頭徹尾大変なお骨折りを頂いた。今回の研究会や巡検が実りあるものになったのはひとえに彼のご尽力による。厚くお礼を申し上げる。次回は大学院の入学試験時期とずれば、もう少し参加者が増加するのではないかと思う。

